

さん 観察日記

一 乱れ航戦、赤城雪丹花
秘めた陰部が花開く

お前らの愛で
字数制限超えた

「提督、AVを撮りましょう」

赤城さんの一言で執務室に沈黙が流れました。何を言い出すんだこの空母は、という視線を向けましたが本人は何がいけないのかという顔です。

「提督、AVを」

二回目も言わんでいい。そこまで重要でない提案を途中で遮ると、やはり赤城さんは何がダメなのか、と疑問符を浮かべた表情を向けてきました。いくらこの鎮守府が提督を筆頭に社会のクズの掃き溜めで、赤城さんが加賀さんと夜の大運動会を昼夜問わずに開催するクソレズであっても、流石に一般市場に正規空母の交尾動画を流通させるのはマズい気がします。ニコニコなのかシコシコなのか判別がつきません。そもそもどこでそんな言葉覚えてきたのかはほとほと疑問です。恐らく雷あたりからでしょうが。

「いけませんか？」

いけません。

「資金に困窮した際、所属している艦娘に弁当を作って売らせるか、そういったビデオを撮って売ると、錬度によってはかなりの額になると聞きました」

私料理には自信がありますよ、食べるの好きですし、と赤城さんは凛々しい顔で力瘤を作るポーズを見せてくるので、思わず頭を抱えました。それなんてエロゲー。恐らく夕張さんが遊んでいるところを見たのでしょう。確かにこの鎮守府も闇市から艦娘を金で（時にはタダで）仕入れてくることは多々ありますし、提督としての仕事も艦隊の指揮というよりはペットの飼育調教に近いところがあります。具体的には餌や欲しいものをそれなりに用意し、安心して暴れて帰ってこれる寝床を整えてやることです。設備のチェックなどもしますが、戦闘や整備は当事者に任せています。頭を撫でたりはしますが、互いに無駄なストレスを増やさないためにも、みだりに体を触ったりはしません。主に金剛による他艦へのセクハラを超えた英国式ダイレクトボディタッチはよく見かけますが。

それはさておき、赤城さん本人はヤル気マンマンのようです。赤城さんは鎮守府に所属している艦娘の中でも格別整った顔立ちとプロポーションを持ち、品評会（ドッグショーの艦娘版）に出せばいい線にいくのではないかと提督ながら思わずにいられない魅力を兼ね備えています。なので彼女が髪を乱し、我を忘れて痴態に狂う様子を収めた映像とあれば、それなりの値段がつくことは予想できます。実際のところは立てば芍薬、座れば牡丹、食べる姿は量産機という「黙っていれば美人」の典型例としか言いようがありませんが。「青葉さんも機材一式貸してくださるそうですし、ね、どうですか。ちょっと遊びだと思っ

て、やってみましようよ。人生何事も粉砕玉砕大喝采ですよ」

どこの社長だよ、と思わず反射的に返事をしてしまいましたが、その返答を聞いているのか聞いていないのか、赤城さんは大きな体を屈めてこちらの顔を覗き込み、色よい返事を待つ眼差しを一心に向けてきます。両腕に抱えたクリアファイルがずり落ち、白い内臓を床一面にぶちまけてもおかまいなしです。

……とにかく提督としては、自分が手塩にかけて育ててきた艦娘が、他の男の下で嬌声を上げるような様子はあるまい見たくありません。どこでそんな悪知恵をつけたかは知りませんが、今は仕事なので、赤城さんも自分のやる事に専念してください。一刻の沈黙の後にそう告げると、赤城さんはきょとんとした表情を見せました。

「どうして男を使う必要があるのですか？」

〈movie set... loading〉



何も無い部屋に、小さい子供が一人置かれている。右上や左下には小さく数字やアイコンが映りこんでいるのは、ハンディカメラによる撮影故だろうか。何故ここに連れてこられたのかと言いたげな顔で、両腕を抱えて蹲りながら部屋中を見回している。白い壁紙はやや黄味がかっている。余り新しくはないのだろう。床は安い一枚のタイルにも、大理石にも見える。どちらにせよ自分の上に座っているものには冷やややかな態度をとっている。

子供は何も身につけてはいない。体格からしても、まだ小学校に上がるか上がらないかといった具合だ。体を振った時に背中が光を反射する。銀色に光る円盤が、脊椎の一部とでもいったげに顔を覗かせている。

《機関部》。艦娘の心臓とも言える部分だ。金属の中には小さな筒がはいっており、《分霊》と呼ばれる原生生物がその中に居を構えている。艦娘の人格とは彼女達の人格のことであり、人間の部分が入れ物にすぎない。

彼女もまた、その入れ物の一つであるようだ。幼い見た目からしてカテゴリーは駆逐艦のうちのどれかだろう。髪留めも装飾も解かれた姿では、似た顔つきのモデル艦が何体も存在するため判別が付きにくい。

不意に物音が聞こえる。画面の外からだ。先ほどまで部屋中を見回していた彼女は、向かって左側を見つめたまま微動だにしない。しばらくすると、手を後ろについて少しづつ後退しようとして試み始めた。腰が抜けて立てないようだ。呼吸が短く荒れ、横からでも瞳孔が開いているのがわかる。姿こそ見えねど、視線の先にあるものは着実に、彼女への距離をつめていく。

カメラが切り替わり、少女の顔が映った。目にいっぱい涙を溜め込んで、頬を痛々しく朱に染め上げている。小さな歯の根が音を立てているのは、着衣を解かれているからだけではないことが伺える。

ちた、ちた、とタイルに吸い付く音がする。一瞬画面が暗転したように見えたが、梓近くの表示は鮮明である。音が遠くなるにつれ、画面は女の後姿を収め始めた。彼女もまた身に何も纏わず、深みのある焦茶色の、長く艶やかな髪だけが歩みに合わせ、微風を受けける簾のように揺れる。体は墨色の御簾に隠れているが、長く引き締まった手足に相応しいものである。

「こんにちは」

カメラが切り替わる。怯える駆逐艦の少女の顔をしかと目に焼き付けるかのように、長髪の女は屈みこむ。女はかなりの長軀で、体を折りたたんでも少女の体をすっぽりと多い隠してしまふ。カメラはズーム機能を使っているのか、二人の間に入り込むようにして二つの顔を捉えていた。女の顔が翳りにあるのも相まって、瞳の黒が深淵を湛え、整った顔に人形のような不気味さを添えている。

「寒い？ 震えてる」

少女はぱくぱくと口を動かすが、声にならない。女は膝の上に置いた手を片方伸ばし、そっと小さな頬に触れ、そのまま包み込むように両手を添えた。

「大丈夫、何も怖いことなんかありませんから」

駆逐艦の少女は安心したのか、荒げていた呼吸を少しずつ収めていった。それを感知したのか、女も口元に微笑みを浮かべ、少女の頬から頭頂部に手を移し、姉が妹にしてやるような、優しい動作で頭を撫で始めた。少女は少し戸惑うような表情を浮かべていたが、次第にはにかんで、さらに頬を上気させた。少し体を寛げ、女の掌の心地よさに身を委ねようと身を前へ乗り出す。女はクスクス笑って、少女の首の後ろを指でこすってやったり、こめかみの部分を軽く押してやったりした。

動物を可愛がるような愛撫が暫く続くと、小さな駆逐艦はすっかり見知らぬ女に対する警戒を解いていた。

仰向けになった女の豊満な胸の谷間にすっぽりとおさまり、大きな手で幼い背中を撫でられている。手が浮いた背骨を行き交うたびにくすぐったそうに身を振り、ついにはふくよかな山に顔を埋める体勢となった。少女と女の視線が合う。女は何も言わずに微笑んでいる。少女は少し気恥ずかしそうに顔をそらしたが、小さな好奇心と奉仕欲に火が灯ったのか、おそるおそる顔に触れている二つの塊に手を伸ばした。小さな手で、白い房の根元を柔く揉む。始めの拳動の後、やや不安そうに女の顔を見たが、女は先ほどから表情を崩さず、少女の背中を撫でているだけだ。安堵して、少女はまた手を動かす。徐々に先端に指を滑らせ、指の腹でそっと撫ぜる。反応が知りたくて忙しく相手の顔を見やるが、彼女は鼻にかかった息を漏らす以外、新しい反応を見せなかった。

それからも摘んだり、捻ったり、被せて掴んだり、思いつく限りの喜ばせる方法を少女は試すが、逆に背中から尻へと介入され、小さく声をあげるはめになった。節の目立つ白枝が臀部の二丘に道を作り、潤いの源泉に首を浅く漬ける。気の緩んだ扉はやすやすと侵入を許し、淡い紅の肉壁はまだ何もわからないまま花蜜を滲み出していく。きゆう、きゆう、

と目を潤ませた少女の喉から絞り出すような音が鳴った。乳房への愛撫は完全に止まっている。

小筒の柔肉が指をしゃぶりだしたのを確認して、女は体を起こし、少女を尻で抱きかかえられるよう腿の上に乗せ、足を投げ出させた。少女は胸に顔を埋めながら、女の首にすがりつき、成長途中の足をくびれた腰に回した。女の髪が少女の首筋をくすぐっていくが、彼女はそれよりも下腹部で行われる未知の儀式で精一杯だ。声にならない声が漏れ、薄い胸板が浅く上下を始める。女のうなじの前で手を交差させ、自分の腕に爪を立てる。

女はだらしなく開いたあどけない口に、自分の唇を重ねた。少女は抵抗する余裕もなく、初めての口付けに応じる。ちゅ、ちゅ、と吸い付く音が響く。指の動きはそのままに、向きをこまめに変え、口腔の一番良い部分を探り当てようと舌で顎の裏をなぞった。紅い蛇が二人の顔の間で妖しくうねっている。

少女は蹂躪されるがままに、目を潤ませながらひたすらに行為に溺れていた。足りない空気を求めて一際大きく声を漏らす。快楽の束縛から逃れようと小刻みに腰を動かすが、逆に堪場へと引きずられていくのを受け入れているようにも見える。女もそれを解って、入れる指を一つ増やす。突然の介入に少女がまた声を上げる。既に悲鳴は嬌声に変わっていた。白濁した歓喜の水が女の掌を伝って床に零れ落ちる。腰に回していた足はだらしなく

伸びきっていた。どちらにせよ限界は近いようだった。

「ひぐっ……やだ……やあ……やだあ……」

淫猥なしたりが激しさを増し、口を放された少女が懇願を始める。声質は見た目相応だが、含まれる熱は大人と変わらない。

「何が、やだ、なの？」

「やあ……やだ……へんなの、くる」

「どこからくるの？」

「おなかっ……」

「おなかのなかに、へんなのがあるの？」

少女はこくこくと頷く。女は少女の背を支えてゆっくりと床に寝かせ、空いた方の手で彼女の少し膨らんだ腹を優しく撫でた。もう片方の手は未だ少女の中にある。

「おなかのどこ？」

「おお、へそ、おへそ、の、し、した、っ」

「ここかな？」

「きゃうううっ」

甲高い声上がり、背が跳ねる。女はへその下を軽く押すと同時に、入れる指をもう一

本増やしたのだ。

「やだああっ！ ああっ、あっ、あっ、ぎいっ」

ギューギュー詰め肉の路で、三叉の矛が交互に蠢く。

駆逐艦の少女は殆ど白目を剥いて体中を痙攣させていた。女はそれでも表情を一切崩さない。

「本当にへんなのが悪さしてるのね。でも大丈夫。すぐによくなるわ」

「ぐうううっ、うぐうっ、あああっああっ」

「力をぬいて、目を閉じて……」

舌が少女の小さな口からはみ出すのを、押し戻すように再び口をつける。唇は先ほどよりも激しく動かされ、ぬらぬらと照らされながら唾液が零れ落ちる。小さな花弁からはどうしようもならない量の汁が溢れ出ている。女も少し興奮しているのか、自身の間からも一筋の河が流れ出ていた。

「んぐううううっ！」

少女の体が一際大きく仰け反る。

瞬間、女の拳が下腹部へと叩き込まれた。

「ぎっ!？」

少女が声を漏らす。破裂音と共に肉がへこみ、赤い液体が撒き散らされ、一部は女の顔にかかる。女は指でふき取ると、見せ付けるように舌で舐めとった。

「おいしい」

駆逐艦の少女は爆ぜた自身の腹の前に目を白黒させている。艦娘に血は流れていない。故に、どれだけ赤かろうがそれは燃料である。燃料を失っても艦娘は死なない。ただその場から動けなくなるだけである。女が四つん這いになり、駆逐艦の顔の横に手を張る姿勢になった。まるで獲物を食い殺す前の豹だ。女の背を隠していた髪が零れ、肌が頭わになる。駆逐艦の背中のもともとよく似た銀盤が女もまた、人ではないことを示していた。

後ろに這って逃げようとする駆逐艦の左肩を、女の手が掴んだ。そのまま指を食い込ませていくと、鉄の潰れるような重い音と、同時に少女の劈くような声が部屋中に響いた。女の手には駆逐艦の肩回りの人工皮膚が、葡萄の実を剥いたかのごとく、肉をまもってべろりと張り付いている。身は鮮やかに桃色で、みずみずしい。女はそれを指で摘みあげ、薄紅色の唇でやわやわと食み、しゃぶる。じゅるじゅると血液オイルと肉とを嚙り上げる。雄の玉茎でも啜えているかのように蕩けた顔で、少しずつ歯で千切る。先ほどよりも昂ぶっているのか、熟れた体に不釣り合いな薄い茂みは夜露で先細っていた。

少女は肩を粉碎されながらも、なお這いずって逃げようとする。女は皮をぱくりと一口、

飲み込むとすぐさま残りの部分にとりかかった。か細い小鹿のような足を片方掴み、力任せに引っ張ると、まず関節が抜け、次に肉が抜け、骨が白の頂を覗かせてから、臆の花弁を開かせて離れていった。途中で筋が一本間に噛んでしまったのか、少女が地獄の餓鬼めいて喘ぐ。女は構わずに白く揃った歯を脛脛に付き立て、食い千切り、咀嚼の行程を飛ばして胃に入れる。黄色の脂肪を残しつつもぶちぶちに切られた肉と血管の様子は、人工タンプクとはいえ人間のそれと同じ様相を曝け出していた。

女はくちゆくちゆと唾液混じりに口を動かす。まずは口の中から鼻の奥へと香りを誘いこみ、呼吸の往来にあわせて楽しむ。含んだものは舌の上で転がし、旨味を味蓄の一つ一つに浸透させ、それから少しずつ飲み込んで、喉の中でじっくり味わう。胸の奥を通り過ぎてからは、胃の弁に触れる塊の感触を楽しむ。幾度となく繰り返し替えず。何十回目に達したとき、女の口の中は肉の残した旨味でいっぱいになっていた。それでもまだ足りないとしても言いたげに、血染めの唇を蛇の頭がなぞる。足は既に白の枯れ枝となっていた。

ぽっかりと空いた穴から、ずるずると腸が引き出される。艦娘は排泄をしないので、厳密には脳にあたる機関部や心臓部のエンジンに燃料を供給する生体パイプの一部だ。ひたひたと手にぬるく纏わりつく肉を両手で弄びながら、女は塊に歯を立てた。ぶじゅると汚い音を立てて、新鮮なオイルが穴から噴き出す。赤い水をシャワーのように全身に浴びな

がら女は喉を鳴らして飛沫を飲み込む。恵みの雨といわんばかりに目を閉じて、顔に掛かる水圧を楽しんでいる。

出方が弱くなると、搾り出すかのごとく腸を歯で押しつぶした。再びぶじゅううと音がして、血液が弧を描く。それから、大型の肉食獣がするように、手で根元をpushさえつけないから頭を大きくのけぞらせ、歯の力だけで啞えた塊を小さくした。そのまま宙に放り投げるようにして、口の中にいれる。今度はゆっくりと歯で潰していく。唾液にまぶされ、肉の味が変わっていくのを楽しんでから、また胃で楽しむ。肉は歯の間で小さくなり、少女は女が腹の穴に顔を突っ込むたびにバッタのように跳ね、壊れた無線のように呻く。女はゆっくりと食事を楽しんでいた。腸をあらかた食い散らかすと、今度は小さくて丸い器官を啞え込んだ。子宮だ。未成熟な女の部分は哀れにも持ち上げられ、本来なら見えうることのない膣の外周をも顕わにしている。女は容赦なく腹腔からそれを引きずり出すと、また宙に放り投げ、一口で口の中に押し込んだ。





赤黒く染まった画面が乱雑に拭われ、また別の少女の顔が映った。先ほどの駆逐艦よりは大きい、まだ熟しきらない活発さを全体に残している。

「ああああもおう、どおうしてくれるんですか赤城さあん。このカメラ高かったんですよお？」
間延びしつつも楽しそうな声で、浅紫の髪を少女は揺らす。彼女が振り向いた先にあるのは先ほどの女と、駆逐艦の少女だ。駆逐艦は小刻みに手足を震わせながら白目を剥き、赤城と呼ばれた女は少女の鼠蹊部に口をつけてぺちゅぺちゅと音を立てている。

「赤城さあん？」

赤城がようやく気付いたのか顔を上げた。均整の取れた顔は真っ赤な化粧を施され、口元にも同じような色の欠片がこびりついている。頬がもぐもぐと動いているところを見るに、何かを口に含んでいるようだ。

「んふーふんふふんふんふんふ？」

「そんななめこみみたいな返事されてもわかりませんよお、ちゃんと食べてからしゃべってください」

「んふんふ、んく、何でしょう青葉さん」

「何でしょうじゃないですよおおおおうとしてカメラ汚すような真似しちゃうんです
すかあああもうっ」

「え？」

きょとんとした顔で青葉を見つめる赤城。不意に、彼女の下にいる駆逐艦が逃げ出そう
と体を動かしはじめた。腹を扶られ、足を齧られ、殆ど空っぽの体でもなんとか逃げ出そ
うと力なくもがいている。その赤城は気配で察し、健気な姿には目もくれず、正確に顔
の中心に拳を見舞った。顔を叩き潰された反動で駆逐艦の体はまた大きく跳ね、齧られて
短くなった手足やずたぼろになった内臓を宙に飛ばし、何度か電流を流されたように不
然な震え方をしてから、やがて動かなくなった。青葉はその様子を潰れたゴキブリでも見
たかのように顔を顰め、やれやれと言わんばかりに額に手を当てる。

「あのね、赤城さん、派手にやりすぎなんです」

「そう……そうなのね？」

「大体ですわね、これ、AVですよわねえ」

「ええ、そのつもりなんですけど」

「えーぶいってなんだかしてますう？」

「へ？」

「えーぶいって、なんだか、しってますう？」

「そう、いうことをするものですよね」

「ええそうです。そういうことです。男の人が、スケベなお汁でばんばんのたままたとおちんちんを、しゅっしゅっしてするためのえっちな道具です。女の人がいやらしいーい草をねちっこおーくみせて、おちんちんをびんびんにさせてから、手なり何なりでしゅっしゅっしてびゅっびゅっするための道具です。おわかりいただけただけでしょうか」

「今キンタマって言わなかった!？」

扉が勢いよく開く音と共に、カメラもそちらを向く。妙高型の艤装を身に纏った女が目を輝かせながら部屋を覗き込んでいる。

「言ってますん」

「そう……」

長躯の女は顔を曇らせ、丁寧に扉を閉めた。

「ほんと足柄さん神出鬼没すぎでしょう……」

「そうだ、今度は足柄さんにやってもらいましょうよ、A V。きっと楽しいことになりま
すよ」

「嫌ですよ。なんであの人のキンタマ伐採ショーなんて撮らないといけないんですか。赤城さんですらこれなのに、足柄さんのAVとかもうただのスナッフムービーですよ。キンタマ大戦争ですよ。いや違うな。キンタマ大虐殺？」とにかく酷いことになりますよ。間違いないですよ。青葉そんなのみたくないです。見たとしても忘れない。大体です。青葉さん、あの人の、そういうの興味ないでしょう。あの人から男の人のおちんちんをしゅっしゅっできる要素が感じ取れるとおもいます？ むしろ逆じゃないですか。もう完全に自分から狩りにいくスタイルじゃないですか。キンタマハンターですよ」

「やっぱり今キンタマって」

「言ってますん」

「そう……」

足柄が扉を閉めるのを確認してから、青葉はまた身振り手振りをつけて赤城に語り始めた。「どうかです。ええ、赤城さん、なんでAVとか言いましたんですか」

赤城は青葉の話を余所に、また駆逐艦の肉を堪能していた。今度は二の腕部分に齧りつき、肉を削ぎ落としている。

「赤城さあん？」

「ん、ええ、そうね、AVの話ね」

「本当にこれ売って足しにする気あるんですかあ？ 芸術品としてもビミョーですよ。もう完全にスナッフなんですすよねこれ」

「青葉さん、さっきからいつてる、すなっふ、ってなんなんでしょう」

血まみれの手をぺろぺろと舐めながら聞く赤城に、青葉は呆れ顔で溜息を漏らす。

「スナッフっていうのはすねえ……赤城さん、あなたの食事風景ですよ」

赤城は周りを見回す。食べかすと、食事の部分のごっちゃになってちらかっている。

「それって……いつも通りじゃないですか。どうしましょう。提督、私、いつも通りの光景をカメラに収めてしまいました」

「こっちに振られても困るんですけど」

赤城が画面に向かって凜々しい顔を見ると、画面の外から返事が返ってきた。提督と呼ばれた人物はカメラを操作しているようだ。

「とにかくですねえ、器材、動かしたからには元取りたいんですよ」

「だからこっちに振るなと言っている」

「ええ、そこは天下の司令官様でしょ、お、無敵のスタープラチナでなんとかしてくださいよ」

「今まで盗撮したレズセックスの数でも数えてろよ」

「二七八五本。撮り損じが三五本。途中でバレた回数が一四五回。殴られた回数八七回。どお？ 青葉、すごいでしょう」

「んふーふふんふふんふじゆるる」

自慢げに胸を張る青葉の後ろで、赤城が食事の続きを始める。青葉はちらちらとそれを見て、また溜息をついた。

「……と、とにかくですねぇ。青葉としてはですねぇ、これ、勿体無いかないって思うわけなんですよ。電気代とか。あ、司令官。ちょっとまってくださいこれカメラ止まってませ」



赤城さんが血迷ってから一週間。完全に動物園のライオンお食事コーナーと化したビデオは青葉に編集を丸投げし、なんとかそれらしき体裁をとることができました。本人たつての希望により、とりあえずDVDに収めて闇市に流しました。闇市には艦娘のスナッフムービーを買い取ってくれる場所があるので、そこらへんに詳しい雷と電のツテを利用しました。「明るみに出せないようなコトするならもっと私に頼ってくれていいのよ」とのことですが、ただでさえ秘書艦がムシヨ帰りなので、これ以上ヤバい方面に突き進むのだけは勘弁願いたいところです。綺麗な空気だけ吸って生きていたい。無理だけど。

さてそのDVDですが、結果的にそこそこの値段がついて売れ行き好調とのことなので、第二弾を取らないかというオフアアがきているのでした。赤城さんはその気です。二度とするかボケ。

(おわり)